

1. 登山記録

トランゴ・ネームレスタワー (6,239m) 登攀

篠原達郎

1. 遠征の概要

- (1) 期 間 1996年6月10日(月)～8月13日(水) 65日間
- (2) ル ー ト 南壁ユーゴスラヴィアルート
- (3) 目 的 上記ルートのフリー再登
- (4) 派遣母体 山岳同人 BSR
- (5) メンバー 隊長 篠原達郎(40) 隊員 菊地敏之(35), 長野岳史(30) 計3名
- (6) ポーター 往路 31人 帰路 8人
パイユからトランゴ氷河のBCまで2ポロ ※1ポロ 200ルピー(1ルピー約3円)
- (7) 費 用 国内, 海外費共で約180万円(1人当たり約60万円)
- (8) キャンプ BC(トランゴ氷河 4,000m), ABC(5,200m), C1(台座 5,600m),
C2(5,900m)
※ABCはC1完成後撤収, C2はポーターレッジ 3台
- (9) タクティクス カプセルスタイル
(a) 上部キャンプが完成したら, 下部のフィクスト・ロープを回収し
そのキャンプを拠点に, 次のキャンプに向け同じようにルート工作する方法。
- (10) 天 候 残雪が多く平野部, 山間部共に天気が悪かった。
※BC以上滞在(37泊38日)で, 晴れ15日, 曇り11日, 雨または雪12日
- (11) クライミング 5.10+ A2 30ピッチ(台座の雪壁3ピッチを除く)
7月27日 午後4時 全員登頂
※クラック内は氷だらけで, 目的のフリークライミングは5.10+までしか追求
できなかった。

2. プロローグ

94年6月, 私は, K2を目指してバルトロ氷河をキャラバンしていた。同じ隊の俵谷とK2の次は, トランゴをやろうと意気投合したのが, 今回の遠征の始まりとなった。

95年トランゴの前哨戦として, カナダのロータス・フラワー・タワーに遠征し, 成功した我々は, 翌年のトランゴに向けて具体的な準備を始めた。同年秋, 俵谷は, ダウラギリに遠征し, 無酸素で登頂したものの帰らず人となった。一時は, トランゴの遠征も危うくなったが, 菊地, 長野とパーティを組み直して行く事にした。

1. 登山記録

菊地も95年に、トランゴを具体的に計画していたが、実際行く者はおらず計画だおれになっていた。菊地とは、82年にヨセミテで知り合い月日は長い、1ピッチもザイルを組んだことがない。長野とは、91年秋に代々木で開催されたワールドカップ東京大会に出場した際に知りあったが、菊地同様ザイルを組むのは初めてだ。彼らは、同じ倶楽部の先輩、後輩に当り長野が新人の頃、菊地が面倒を見たらしい。しかし、トランゴが10年ぶりの山行になるという。

この手の遠征は、「いいね」、「行きたいな」と言う者はいても実際に成田を飛び立つクライマーは、非常に少ない。一番大切な事は、体力、テクニックはさることながら「行きたい」、「絶対に登りたい」という情熱なのだ。

特に、近年の日本では、ヒマラヤの場合8,000m峰の遠征には、毎年いろんな隊が出るが、ビックウォールや困難なミックス壁のクライミングに出かけるメンバーは、残念ながら非常に少ない。

3. 遠征

(1) アプローチ

6月10日 我々3人は、予定通り成田を飛び立った。しかし、問題はあった。90日間申請したビザが何と60日間しか認められていなかった。日本では、どうする事も出来ずパキスタンで訂正するように、日本のパキスタン大使館に指示されていたが、これが大変で丸3日もかかってしまった。

どこの国も変わらないが、特に、パキスタンはひどく外務省と観光局を毎日数回往復する事になった。

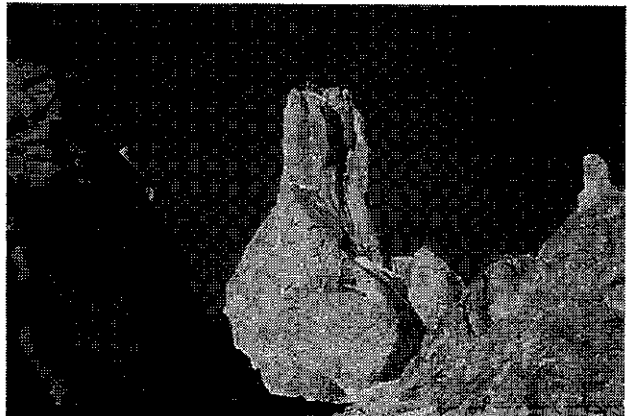
イスラマバードの街は、2年前と変わっていないが前のような灼熱の熱さはなく、毎日のように夕立があり、日本の6月と変わらない異常な天候が続いた。同様に、スカルドでも異常気象で3日間雨が降った。

この雨で、トンガまでのジープ路(94年度はアスコレまで)が崩れビアンサから2日余分にキャラバンする事となった。6月27日、予定より遅れはしたもののトランゴ氷河に、無事ベースキャンプを設営する事が出来た。

ビザの不手際が、キャラバンの遅れと予期せぬポーター賃金の出費となった。

(2) クライミング

翌28日は大雨で停滞。29日、ポーターを6名使いトランゴタワーに突き上げるルンゼ内に、荷上げをするが、途中から吹雪となる。ボルダーの下にボルトを打ちデポキャンプとする。



1. 登山記録

30日もベースは雨、上部は吹雪で停滞。しかし、これで、やっとスタートラインに着けた。日本を出国して3週間になるが、1ピッチも登っていない。早くクライミングがしたい。

月が変わりやっと本格的な活動が始まった。第1ステップは、ABCを完成させ下部岩壁のルート工作と台座への荷上げ。第2ステップは、下部岩壁のフィクスト・ロープを回収し、台座上のC1を拠点にメインウォールのルート工作。第3ステップは、メインウォールに設けたC2（ポーターレッジ3台）からの登頂。これが、我々のプランだ。

アルパインスタイルで、オンサイトフリーを狙うのが最高のスタイルには違いないが、我々には、その力はない。かといって、極地法を採用したのでは、確実には違いないが、手間隙はかかるしクライミングの面白さは失われてしまう。

7月2日 久しぶりの晴天の中、デポキャンプを目指して登る。デポは、雪に埋もれてはいるが問題がない事を確認して、リトル・トランゴ側のコルを目指す。ルンゼは、傾斜を増してくる。ロープを出して1ピッチのアイスクライミングで、コルには上がる。BCからここまで標高差1,300m、4時間かかった。まだ高度順化していない我々には辛い。コルは、狭く3人がやっと立てるぐらいだ。ドゥング氷河側は、腰まで滑る今にも雪崩が出そうな急峻な雪壁で、写真で見た景色は、どこにもない。

雪の量が凄すぎて取付きがはっきりしない。コルから100mロープで下降し、双眼鏡で下部岩壁をくまなく見ると、ユーゴルートのビレイポイントらしき物が見つかる。ウリビアホに沸いた黒い雲が流され、粉雪が舞ってきた。今日はここまでとし、ルンゼを下降する。上から見ると100m程下の左側にオーバーハングした壁があり、その取付きにテントが張れそうだ。うまくABCの場所を見つけた。

昨日の行動で菊地、長野が雪目になってしまう。菊地は終日OFFとし、程度の軽い長野と午後からABCを建設する事にする。翌日、長野と二人で下部岩壁の工作に向かう。1ピッチ目は、私のリードで始める。やっと、トランゴにタッチが出来た。30mで前回見つけたビレイポイントに達する。次のスラブのトラバースは、2mも残雪があり、長野がプラブーツでリードする。3ピッチ目の凹角は、急な流水溝になっており始末に悪い。4ピッチ目は、比較的快適な岩に長野がロープを50mいっぱい伸ばす。次のピッチは、完全な氷で傾斜もきつい。バーティカルアイスの用意をしていないので、今日は、終了とする。ロープを張りなおし下降すると、菊地がコルまで上がって来ていた。

また、天気が崩れ雪が降り出したので、休養のためベースに下山する。

7日 ベースを早朝出発し、前回の到達点までユマールで上がり菊地のリードで始める。氷が無ければ5.9ぐらいの凹角だがかなり悪そうだ。一度、墜落をするが根性登りでぬけた。凍ったスラブで私も墜落し、長野が、横の氷をダブルアックスで登るなど苦勞しながらも、さらに3ピッチ伸ば

1. 登山記録

すとやっと台座の肩に届いた。

トランゴ氷河側のオーバーハングした壁に、よく見ると古いフィクスが垂れており、ビレーポイントもある。恐らく、荷上げルートのようなのだ。回収したロープを張りながら降りる事にする。手持ちのロープ6本全部を使いきってぎりぎりルンゼに下り立った。8日から11日まで晴天が続き、おかげでC1の建設も無事終了した。9日、10日とC1に泊り高度順化も済ませる事が出来た。C1まで当初は、5〜6ピッチかと予想していたが、結局10ピッチあった。思いのほか下部岩壁は、手強かった。

また我々は、乾いた硬いヨセミテのような岩を想像していたが、今年は、考えを改めざるをえない事を悟った。

12日からは悪天の周期になり、結局、長すぎる6日間の停滞となった。ドゥンゲ氷河側は、韓国のトランゴチームが1パーティ入山しているが、トランゴ氷河側は、我々のみでK2やGⅡのベースキャンプと違い静かすぎて寂しいくらいだ。シプトン・スパイヤーのアメリカ隊とスウェーデンの偵察隊がベースに遊びに来て、丁度いい気晴らしになった。

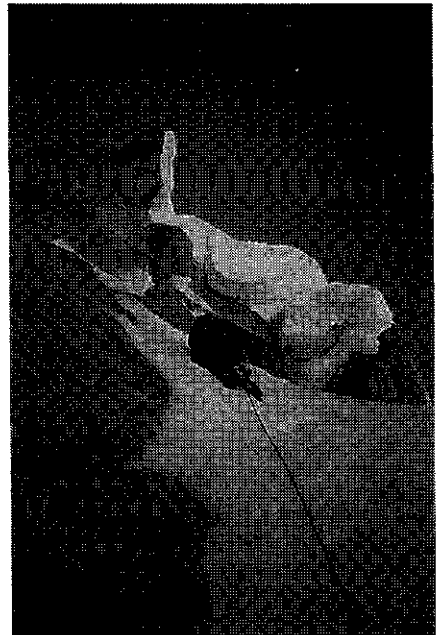
18日フィックスを回収しながらC1へ上がる。下界との生命線が無くなると緊張感から、いよいよ本番に突入した実感が沸く。

メインウォールの20ピッチは、一番フリーの追求出来るハングとスラブで構成されており、下部5ピッチを長野、上部雪田に続く10ピッチの凹角を篠原と菊地、雪田から山頂は、ケースバイケースとし19日よりクライミングを始める。

19日 晴れてはいるが風が強く寒い。夏のカラコルムの太陽ではない。長野が下部のハング帯をオンサイトし3ピッチ登る。2m程張り出したハングは、ロケーションも最高なので菊地がカメラマン、私がビレーヤーを務める。長野いわく5.10Cとの事。

20日 4ピッチ目、振り子の部分で惜しくも1回テンションする。天気も今一つ安定せず雲が広がって来た。レットポイントを狙わず先を急ぐ。次のピッチは軽くクリヤー下部5ピッチは終了。

凹角からは、篠原に交代。5.10-ぐらいのオフィズスのピッチ。上部は、閉じたクラックになり日が当りにくいせい氷が張り詰めている。オフィズスの部分は何とかフリーで行けたけど、上部の閉じたクラックは、凍っておりフォールする。何度かフリーでトライするが、抜けられずフレンズを掴みA0で登る。天気は、明らかに下り坂でC1へ下降する。この高度になると5.10-でもバ



1. 登山記録

ワーの要るルートは、心臓が飛び出るほどこたえる。

21日 朝から雪で停滞。

22日 完全に凍り付いたロープをユマールで上がる。テラスは、雪で埋もれている。プラブーツからラバソールに履き替え岩に取り付く。ラバソールで登り始めたものの冬壁と変わらず人工を多用して登る。気付くと天気が悪くなっている。残念だが今日は、1ピッチのみで下降する。

アルパインスタイルと違い、C1を設けているので、天候が不安定の際は心強い。午後より吹雪。

23日 吹雪で停滞。

24日 C1で約30センチ積もる。22日のクライミングで軽い凍傷になる。フリーは、無理と判断しプラブーツで登る事にする。壁の状態は、22日より悪い。人工で私が2ピッチ登り菊池と代わる。同様に菊池が2ピッチ伸ばし終了とする。あぶみに乗りながらクラック内の雪と氷を落としフレンズをセットするため時間がかかる。

25日 朝のうちは晴れているが安定してないので停滞とする。14時より吹雪。

ほぼC2予定地までロープを伸ばしたので慌てる事はない。

26日 5時起床 昨日までの空の色と明らかに違う。これがカラコルムの夏の空だ。アタックの時がやって来た。C2に上がる事に決める。ロープを回収しながら、C2予定地に向かう。ビックウォール・クライミングは楽しいが荷上げは辛い。篠原が、C2を作り菊池、長野でロープを伸ばす事にする。C2より2ピッチのぼす。ポーターレッジに乗りながら夕暮れのカラコルムの山々を眺めていると「来てよかった」、「俺は幸せだな」とつくづく思ってしまう。

27日 天気は快晴。昨日張ったフィクス2ピッチを含め頂上まで多分10ピッチぐらいだろう。飛ばしてなんとか今日中に登って、C2まで下降しよう。スピード感の無いクライミングは、もう飽き飽きだ。

この高度になると、今年は、雪と氷の世界でもうフリーどころではない。私の頭には、残念な事にフリーは消え、頂しかなかった。

氷柱、オフィス、オーバーハングを越え私達は、3時30分頃、肩に抜けた。太陽はかげり寒い。目の前に、巨大なマッシュルームを付けた頂がある。日がそこに当たり、いかにも絶頂を示している。私達は、ハンクしたマッシュルームに走るクレパスを最後のきわどいクライミングで登った。

頂上は3人がビレイ無しでは、立てない。しかし、日が当たり暖かい。ムスターグタワーとK2が重なって見える。最高の瞬間だ。

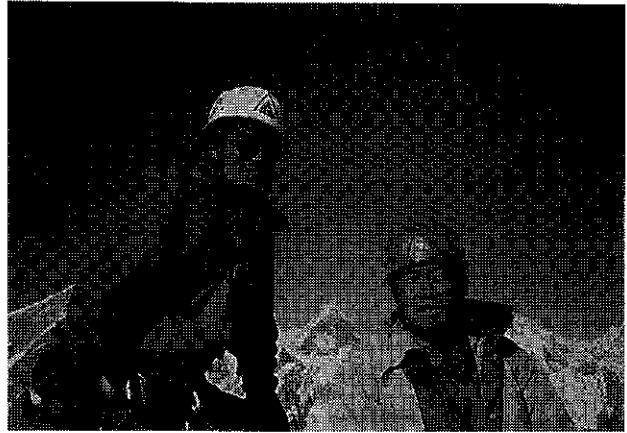
ついに登った、これで夢が現実になった。我々は、長い下降に入った。

4. エピローグ

山屋上りのクライマーにとっては、過程も大切だが頂きも尊い。目的の一つであるフリークライミングは、最悪の条件と言いながらも5.10+までしか追求する事が出来なかった。毎日が快晴無風

で、岩は乾き最高の条件ならば、オールフリーは、可能か？答えは、残念ながらNOである。

菊地は、高難度のクラックをこなし、5.13クラスを50本以上登っている。もちろん、アルパインクライミング、ビッグウォールの経験も十分にある。長野も、菊地同様、数多くの5.13を登り経験も十分にある。私も、へたくそながら数本の5.13を登っている。



極地法を採用し、数多くのレットポイントで登るなら6,000mの高所でも可能だと思うが、限られた時間と物資で登る場合は、オンサイトが原則となってしまう。この場合、下界で5.13ぐらいは、かるく一撃出来なければ、6,000mの5.12などオンサイト出来るはずもない。

88年に故W・ギュリッヒがフリー化しているから、我々もやってみようとなったが、実力は別としてフリー未踏の場合、我々にこのような発想がひらめいたかどうか？私も含め、大多数の日本人クライマーは、残念ながら発想力に乏しいような気がする。

個性の強い、見知らぬ男3人チームでは、大喧嘩になり最悪、成田で敗退などという事も考えたが、問題になるようなトラブルもなく、十分トランゴを楽しめた。ともあれ、3人とも登頂出来、無事に帰国出来た事は、何よりも嬉しい事だ。私達にとって、素晴らしい目標の「トランゴ」は、素晴らしい思い出となった。

次の目標をめざし、菊地は、ヨセミテへ、長野は、5.14を登りにヨーロッパへ、私は、この原稿が終わったら韓国の特ワソン氷柱へ旅立つ。

クライマーにとって、次の目標に向けて努力出来る事は、何よりも喜ばしい事だ。

(山岳同人BSR)